



『拉致』



齊藤 想

齊藤想『拉致』

その宇宙人は、徹底的に生まれただけにこだわった。

卵生であれば卵のまま拉致し、胎生であれば出産直前の母親を拉致して、子供を取り出すと母親だけ元に戻した。

宇宙人の目標は、銀河に散らばる知的生命体を集めることだった。彼らを子供のときから育てて自星の文化を刷り込むことで忠実な愛国者に育て上げる。そして、彼らを再び母星に戻して様々な工作活動に従事させようというのだ。

もし、彼らが政府首脳に納まれば、平和のうちに占領することができる。そこまで上手くいかなくても、内部に味方がいれば外交交渉も世論工作も行いやすい。

彼らは銀河系基準から言えば、とても平和的な宇宙人なのだ。知的生命体が住む星たちを力で征服するつもりはない。拉致された赤ん坊は可哀想だが、なにしろ産まれる前に奪うのだから、本人は拉致されたという認識を持ちようがない。しかも、周りは宇宙人だらけだ。世話をする宇宙人を本当の親と信じて成長する。地球の赤ん坊を育てることぐらい、文化の進んだこの星では朝飯前なのだ。それに、拉致された星にとってみても、ほんの僅かな犠牲で結果として戦争が防げるなら安い保険ではないか。

もちろん、地球人の赤ん坊も拉致された。

赤ん坊が初めて目を開けたときに見たものは、全身毛だらけの化物だった。もっとも、赤ん坊の世話をするのは毛むくじゃらの宇宙人なので、そのことに赤ん坊が違和感を覚えることはない。

地球人の赤ん坊は、順調に成長を続けた。しかし、成長すればするほど、子供は親として接してくれている宇宙人との差異が気になってくる。

そして、ある日、ついに地球人は聞いた。

「ぼくの本当のパパやママはどこにいるの？」

「なんたること」

黄色いくちばしを持った宇宙人は驚愕した。

「産まれて始めた見た動くものを親と思わない知的生命体が存在していたとは！」